

英語学関係

吉村 耕治

国際社会で通用する人材の育成を目指して、日本の英語教育史上で最大の挑戦が推進されている。そのため、英語学関係では英語教育に関する論考が、特に増加している。この現象には、海外だけではなく日本国内でも異文化コミュニケーションや多文化共生が、重要な課題になりつつある現状が反映されている。

日本の文系の大学は産業界から「社会で即戦力になる人材を育てていない」という批判を受けていたことから、国際共通語としての英語を用いて思考し表現する能力を育成するための教育環境づくりが進められている。文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を2013年12月に発表した。2014年2月から9月にかけて、英語教育の在り方に関する有識者会議を9回開催し、英語教育改革の5つの提言もまとめられている。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきと提言されている。

ヨーロッパでは、個人が複数の言語を習得することを目指す複言語主義を推進しており、科目力や語学力に加えて、多面的思考力や協働力を育てる包括的教育法としてCLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習) が普及しつつある。さらに、親元や教員から離れて見聞を広げることを目指すギャップ・イヤーも、イギリスで始まり、世界的に注目されつつある。

World Englishes (世界諸英語) の台頭によって、英米の発音の威信が低落する

可能性も否定できない状況があり、「二ホン英語は大学英語教育の目標になりうるか」を考える論考(著者の答えは条件付きでYes)や、アメリカ合衆国の心理学者Kaganなどが主張する互惠的協力関係や、グループの目標と個人の責任の明確性、対面での活発な相互交流(参加の平等性)、活動の同時性(小集団活動の奨励)、活動の振り返り(改善手続き)という5つの基本理念から成る「協同学習理念を取り入れた英語リーディング授業」に関する論考がある。協同学習を成功させる仕掛けとして、課題への集中(Keep on Task)や、皆と一緒に実施(Include Everyone)、静かな声(Six-inch Voices)、仲間と座る(Stay with Your Group)、皆を励ます(Encourage Everyone)、多くの考えを共有する(Share Ideas)という技能のKISSESが紹介されている。

母語を使わないでBasic Englishを前提とした英語の授業法の「GDM (Graded Direct Method) から何を学ぶか—生徒が学ぶ英語授業のために」を考える論考もある。GDM授業では学習者は常に自分にとっての表現が要求されている。

他にも、「日英語の形容詞の語順の比較—old colorful potsが『色鮮やかな古いつぼ』になるのはなぜか」や学際的研究もある。言語の理解や視覚認知、聴覚認知は、それぞれに特化した脳領域が動員されており、朗読されると、腹式呼吸や軽い有酸素運動にもなる。ストレスの軽減に役立つ表現研究も可能である。表現研究においても、人と人とが理解し合うための人間教育が基盤で、社会に役立つ表現研究の推進や研究の多様性が求められる。(関西外国語大学)